Jeep® BODY

Base Model:Jimny SJ 40-1

外観からは ジープにしか見えない マニアックカスタムの隠しワザ

ベースモデル:ジムニーSJ40-1型
コンプリート:オーナーハンドメイド

「なんでここにジープ……」と思いながらも、何かおかしいとお感じの方。そう、これはジープではなくジムニーなのである。非常に稀少なWillys・DJ3A。しかしエンジンはLヘッドのゴーデビルではなくOHC、シャシーは閉断面構造。外見を眺めていただけじゃ、このクルマの本性は見抜けないのだ。

すぐにはわからないが、ジープとしては少し不自然に思えるところがある。フェンダーミラーとマーカーランプの雰囲気がアヤシイ。実はこのクルマのベースはSJ40で、車検に適合させるため三菱ジープのパーツを流用しているのだ。ジムニーフリークならフロントバンパー下のシャックルに、まずは注目。ナロージープ独特のコの字形をしたシャックルの代わりに、見慣れたプレート形のシャックルがあることを考えると、シャシーがジムニーであることがわかるはずだ。オリーブドラブに塗られていて目立たないが、SJ40特有の6穴ホイールもジムニーの証である。ジープはジムニーよりひとまわり大きいという先入観があるが、ホイールベースはご存じのとおり、まったく同様。昔のナロージープと比べると、SJ40の方が全長と全幅は逆に大きいくらいだから軽規格には収まらないものの、小型車であれば寸法的な問題はなし。センタートンネルの加工を考えた結果、ボディをそのまま載せるのではなく、SJ40のフロアパネルとファイアーウォールを流用したところがポイントだ。フロアからアウターパネルが立ち上がるところで、ジープの「床なしアウターボディ」と接合することになったのだった。

ファイアーウォールの高さの都合上、ややボディリフト気味にボディパネルを組み上げざるを得なかったが、結果は見事にフロアと一体化。窓の外の景色はまぎれもないジープ、フィーリングと足下はジムニー、という摩訶不思議な異次元空間が生まれたのだった。

Jeepを知らねば、カスタムのツボはわからない

ベースとなったジープは1955〜1965年までの間に1万3000台が生産されたWillys Overland社製のDJ3A。大戦で活躍したMB/GPWの民生版として戦後に誕生したCJ2Aのマイナーチェンジ版のCJ3Aをベースに、リアのみの2輪駆動とした仕様だった。トラックや乗用車として使うだけなら不要になるフロントの駆動系を取り去ったDJ3Aには、メッキのホイールキャップを付けた特別仕様車「Gala」が追加されてレジャー用に販路を広げる一方、政府関係機関にも納入。とくにハードトップモデル「Dispatcher」は、ウェザープルーフ性が評価されて郵便車として活躍したのだった。ちなみにディスパッチャーは後継モデルのDJ5にも設定され、郵便の集配に便利なようにと、路肩側へ運転席を移した右ハンドル車も設定された。ディスパッチャーボディはスライド式のフロントドアと、ランクル40系のようなFRP製のルーフ部が特徴。これからもわかるように、このジムニーに載せられたボディはディスパッチャーではなく、当時アフターマーケットで販売されていたと思われるKoeniq Iron Works社製のハードトップ。そもそもは沖縄の嘉手納基地にあった車両だから、米軍がある種の「特装」として導入したとも考えられるが、詳細はオーナー自身ですら把握できていないという謎めいた経緯を持つボディである。

テキサス生まれのハードトップは全天候型の優れもの

クルマといえば幌が珍しくなかった当時でも、特に寒冷地では耐候性に優れたクローズドボディの需要があったため、自作を含めて市場には多くのハードトップキットが送り出された。Koeniq Iron Works社製のハードトップは、ボルトオンで装着できるように設計されたもので、元のウインドウフレームを利用して取り付けるタイプ。フロントドアは一般的なヒンジ式だが、リアゲートは上半分跳ね上げ、下はスイング式というユニークなもの。ルーフを含めてすべてスチール製である。

ボディ丸ごと乗せ換えで、'50年代にタイムスリップ

ひとことで言うならば、違うクルマのボディへの載せ換え。有名なところでは、1983の東京モーターショーに出展されたマイティーボーイボディ・SJ40が印象的だった。ちなみにマニアの間で話題となったマー坊は、ショーモデルに習っていくつかのショップの手により、カスタムモデルが数台が作られたという経緯がある。ボディ乗せ換えは、作業と同時に構造変更申請が必要になるのだが、フレーム付きであるために比較的簡単に車検をパスできる。むしろ大変なのはフロアと外装のつじつま合わせで、いかに雰囲気を乱さずにマッチングさせるかがキーポイント。外観のルックスとドライブフィーリングのミスマッチ感こそ、他車ボディ流用の最大の魅力といってよいだろう。

●エクステリア

特徴的なCJ3Aのフロントグリルは、ジムニーのボディマウントにうまく装着。ヘッドライト下のウインカーがCJ3Aオリジナルだが、車検をパスできないため三菱ジープのコンビネーションランプをフェンダー上に備えている。

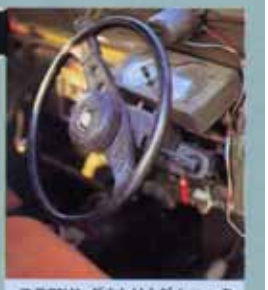
リアのランプも片側シングルに代わって、三菱Jeep用を装着。リアバンパーはファイナルメンバーに被せ、ボディーマウントとフック固定ボルトで共締めし、ピントルフックを装着している。曲がったマフラーは、ジムニーの証。

ボディサイドパネルのサイドシル部は、わずかに下側へ鉄板を継ぎ足して延長。ホイールハウスに見える線が、ジープボディのホイールハウスとジムニーのフロアとの継ぎ目である。

●エンジンルーム＆インテリア

ゴーデビルに代わって、エンジンルームに収まるのはF10A。5年間火が入れられなかったエンジンだが、簡単に始動できたのには驚く。そんな後群の信頼性も、魅力の1つと言えるだろう。

ファイアーウォールの左右端で、ジムニーとジープの融合が図られている。そのため、イグニションコイルなどの位置もまったくSJ40オリジナルのまま。



ステアリングまわりもジムニーのものを流用。メーターは分解して丸いガラスをはめ込んだ特製のボックスに納め、まったく違った雰囲気を演出している。ワイパーはピザ屋のバイクに使われているおなじみの電動式へと変更。

ちょっと違和感の残る、ジムニーそのもののセンタートンネル。ごていねいにヒーターコントロールユニットも移植されている。DJ3Aは左ハンドルのため、ダッシュボードの切り欠きは鉄板で塞ぎ、コーションプレートが貼られている。

リアのホイールハウス内側の荷台幅は、ジープとジムニーではほとんど同じだったため、箱形ホイールハウスの立ち上がりのところで継いであるのがわかるだろうか。

●ハードトップボディ

扉のリミッターは、ジムニーと同じヒモ。ガラスを下げて窓を開け、電車のようにラッチでガラスの位置が固定されるタイプ。

窓が小さく、どことなく装甲車のような雰囲気のあるKoeniq製ハードトップ。ボルトオンで装着されているが、鋼板は厚くしっかりとした作りが特徴的である。

リアウインドウは、左右スライド式。窓が小さいため視認性はあまりよくないが、開いて換気できるのがメリット。

珍しい上半分跳ね上げ、下スイング式のテールゲート。跳ね上げた扉は、ガスダンパーではなく、ボンネットフードのようにつっかえ棒で固定する。

Jeep用語小辞苑

ゴーデビル(go-devil)
型式名称・463、大戦で使用されたMB/GPWに搭載された直列4気筒・2199ccエンジン。バルブがシリンダーの横に付くサイドバルブ方式のため高回転は苦手とするが、111mmものストロークがもたらす低速トルクが魅力的。

オリーブドラブ(olive drab)
いわゆる、軍用車の濃緑色。敵からの攻撃を避けるために、通常は樹木に近い保護色としてオリーブドラブが塗装色として使われることが多いが、軍隊や環境によって微妙に色が異なる。

ナロージープ
CJ3Aの後継モデル・CJ3Bのボディを元に、エンジンを載せ換えて40年以上生産を続けてきた三菱ジープは途中でボディ幅を広げたため、それ以前のボディをナロー、以後をワイドと区別して呼んでいる。ゆえにこれは日本でしか通用しないので注意。

ウイリス・オーバーランド社(Willys Overland)
ジープを生み出したメーカーとして有名だが、厳密にはアメリカンバンタム社が開発したBRCを元に、米政府がウイリスに改良型・MBの量産を命じたのだった。戦後しばらくして買収され、現在はクライスラーに引き継がれている。

CJ3A
CJ2Aのウインドウフレームを大型化し、幌の装着を容易にしたマイナーチェンジモデル。国産ジープのノックダウンはこのCJ3Aに始まり、三菱ではそれをCJ3A-J1と呼んでいた。

●作ったのはこんな人

SJ40 with Jeep bodyのオーナーは、4輪駆動車だけでなくモーターサイクル収集家として高名な、[illegible]さん。4輪車のコレクションはオールド・ミリタリーJeepが多くを占め、DJ3Aも嘉手納基地から放出されたものを持ち帰ったのだという。2輪駆動ということで人気は低いものの程度は悪くなく、当然その希少性を十分に承知のうえで作業に着手。修行の足りないジープ好きなら「もったいない!」と思ってしまうところだが、あまりに膨大なコレクションを持つ氏にとって、これくらいはちっとも惜しくないらしい。つまり、「書類の問題で登録が難しいし、ただ寝かしておくよりジムニーに載せて走らせたほうがもったいなくない」ということなのだ。オリジナリティを尊重すべきモデルは原型をとことん追求し、それ以外のモノで多いに遊ぶ、というのが氏の考え。ジープマニアにとっては垂涎ものの稀少なDJ3Aを、「あんなモノ」と言い切ってしまうところに、掛札さんのマニアぶりがうかがえる。今回ボディを使用したDJ3Aのシャシー部分は輸出してしまったそうで、「今頃フィリピンあたりでジープニーにでもなっているんじゃないの」とおっしゃる。「ちょっともったいなかったかな?」と言いつつも、まったくそんなことを感じさせないところにマニアとしての余裕があったりするのだ。